

ドミニコ会士アポルダのディートリヒの世界

—『聖エリーザベト伝』『聖ドミニコ伝』成立の背景—

この報告では、13世紀末ドミニコ会士アポルダのディートリヒによる2つの聖人伝、『聖エリーザベト伝』『聖ドミニコ伝』の構成から聖人伝作者としてのディートリヒの特徴を論じた。彼は聖性として死後奇蹟よりも生前の行いを重視したが、その背景にはこの時期に修道会としての存在意義を確認し、司牧のために文書を必要としたドミニコ会士ならではの事情があったのである。

13世紀の社会で托鉢修道会は観想的生と活動的生の双方を実践しながら、教会の教えを俗人に伝播する主導的役割を果たした。1217年頃にドミニコが設立したドミニコ会は、模範的生活を送る説教者の育成を目的とする共同体となった。この会は在俗聖職者やフランシスコ会と対立・競合しながら発展し、特に学問において存在感を示した。

同時期にドミニコ会士は多数の文書を作成したが、そのジャンルの1つに聖人伝がある。受け手としての俗人が清貧など宗教的関心を高めるにつれて聖人伝の役割も変化し、従来の奇蹟重視から徳として模範的行動を提示するようになりつつあった。そのため、清貧を実践した新しいタイプの聖人の伝記作成や、既存の聖人伝の書き直しが見られた。聖人伝は描写に類似が多いといえ、成立背景や記述の分析から聖性に付与された価値観の変遷を読み取るには有益な史料である。本報告では例として、ディートリヒによる2つの聖人伝を取り上げた。

そのため、まずディートリヒの生涯とその環境を概観した。「1247年にエアフルトのドミニコ会修道院に入った」のが、彼について唯一確実な日付である。先行研究からは1220年代末にエアフルト近郊のアポルダで生まれて生涯の大部分をエアフルトの修道院で過ごし、1300年代初頭に死去したと考えられている。当時のエアフルトは経済的に繁栄した貿易都市であり、ドミニコ会修道院はテウトニア管区で急増しつつあった男女の修道院で指導的役割を果たしていた。ドミニコ会士は俗人への説教に加えて女子修道院を訪問し、聖務や告解を聞くなど、積極的に司牧に関わった。ディートリヒも、ヘルフタのシトー会女子修道院院長大ゲルトルートと交流があったとされる。従って、13世紀末のエアフルトでは司牧のために人材と文書が求める背景が存在していた。

次にディートリヒによる2つの聖人伝を概観したが、これらには共通点がある。どちらも1280年代末から1300年にかけて、ほぼ同時進行で書かれたと考えられている。また対象とする聖人はどちらも清貧の実践を聖性の特徴とし、教皇グレゴリウス9世により列聖された。しかし、最も重要なのは構成に見られる共通性である。全体を単に章に分けるだけでなく、巻(*liber*)もしくは部(*pars*)に大きく分割した後、さらに章(*capitulum*)に再分割するという、2層構造になっている。また序が2つ、伝記部分が8つ、そして結び、と全く同じ数に分割されている点が目を引く。

序が2つあるのは聖人伝では比較的珍しいが、ディートリヒの意図的選択と考えられる。この形式の序は12世紀末頃から見られ、「外的序(*extrinsic prolog*)」と呼ばれる第1の序は主に手法や文献などを論じる。一方「内的序(*intrinsic prolog*)」と呼ばれる第2の序は、テクスト本体との近さから内容や構成など、より重要なことが述べられる。『聖エリーザベト伝』第1の序でディートリヒは使用した文献の列挙に加え、既存の伝記への不満を述べて

いる。このため自発的に執筆したと考えられている。第2の序はエリーザベトの伝記にもかかわらず夫、テューリングゲン方伯ルートヴィヒへの言及の多さを弁明した。従来女性は未婚が最も報いを受ける身分とされ、既婚の女性に聖性が認められるのは修道院に入った場合のみだった。しかしディートリヒが夫の存在を不可欠として組み込んだことは、ディートリヒが既存のエリーザベト伝作者と異なり、妻としてのエリーザベトに聖性を認めていたと示している。一方『聖ドミニコ伝』の第1の序ではドミニコ会を神に派遣された霊的修道会として称賛した。第2の序では、創設者ドミニコを清貧の模範的存在とし、会士を霊的子供と位置づけた。清貧の衰退への懸念と創設者への回帰が呼びかけられている。既存のドミニコ伝がドミニコ自身よりも会士たちの奇蹟を強調し、その権威に頼って聖性の証明を試みたのに比較すると、ドミニコの存在感が増している。序において、ディートリヒはそれまでの聖人伝と異なる視点からの記述を意図し、それを正当化した。

さらに、ディートリヒによる伝記の構成を検討した。『聖エリーザベト伝』は全8巻のうち1巻が少女時代、2-4巻が妻、5-8巻が寡婦としてのエリーザベトを扱う。彼以前のエリーザベト伝が模範的寡婦としての晩年にのみ記述を集中したのと比較すると、前半生の記述量が増加した。一方『聖ドミニコ伝』は1-4部がドミニコの生涯、5-8部がドミニコの列聖と会の発展を語る。この伝記はボローニャのサン・アグネス女子修道院長チチェーリアによる『聖ドミニコ奇蹟録』を資料とする最初の伝記だった。この『奇蹟録』の参照部分は2,3部に集中し、やはり前半部の記述が拡充されている。構成を考慮すると、ディートリヒが死後奇蹟や特定の時期を強調することなく、聖人の生涯全体を対象とした伝記を書こうとしたといえる。

このように、ディートリヒの2つの聖人伝を比較すると、執筆動機や聖人の違いを超え、類似した意図で構成されているのが明らかとなった。既存のエリーザベトやドミニコの伝記が聖性の特徴に焦点を絞って記述したのに対し、ディートリヒは聖人について遺漏なく書き留めようと志し、それによって聖性はより多面的になり得た。例えば、エリーザベトは模範的寡婦に加えて理想的妻とも解釈しうるようになったのである。このような記述の変遷の背景には伝記作者の個性のみではなく、聖人伝の使用法や想定読者の拡大など、より大きな社会的変化の反映も考慮する必要があるだろう。